

わが顔

市川茂子

満月の明りとどかず街灯の下をそぞろに家路をたどる

冬支度せぬ間に寒き夜となりベッドカバーをかけしまま寝る

夜の雨にうたれて落ちし金木犀いろ鮮やかに路肩に散りて

思い託す候補の名を書き投票所出でくる今日は土砂降りの中

ほとばしる思いは言葉にならずして耳かたむけて風の音聞く

夢の中少女に呼ばれ手を取ればそのやわらかさ兎羅綿とろめんのごと

咲き終えし朝顔のつる引く前の種を集めてまた咲かせんと

葉がくれに南天の実の色づきて通りすがりに手を触れてみる

ウインドーに映るわが顔叔母に似て後ろ姿は母のようなり

よく似たる母と叔母逝き久しくて声も仕草もわれはまとい